

一	い	か	な
冊	+	し	つ

工藤美代子・選  
(ノンフィクション作家)

Ambarvalia  
(アムバルワリア)  
旅人かへらず

西脇順三郎著

講談社文芸文庫  
1595円



毎日新聞  
2022年4月2日(土)  
〈今週の本棚〉

小学生の頃、この世で一番偉いのは詩人だと思っていた。学者、小説家、政治家などは、コケの一念で努力すればなれる。でも、詩人だけは、詩人の魂をもっていなければならない。高村光太郎、与謝野晶子、北原白秋といった詩人がもつばら憧憬の対象だった。

そこへ中学生になった頃に、ある日本人の詩人が現れた。ノーベル文学賞候補となった西脇順三郎である。この人の初めて詩集は英語で書かれて、イギリスの文壇で認められた。大変な秀才で、中学時代は授業のノートをすべて英語で取った。慶應義塾大学を卒業する際は、英語で卒論を書く学生は他にもいるので、彼はラテン語で書いた。指導教官はそれが読めず、英語にしてくれと頼んだという。

こういった秀才神話がわが家の中にどっと溢れた。別に全国的に広まった伝説とは思えない。というのは、私の父が偶然に西脇の中学の後輩だったのである。その縁で父は西脇と親交があった。ちなみに西脇は明治27年に新潟で生まれ、若くして英国に留学した。大正14年に帰国した翌年に慶應義塾大学文学部の教授に迎えられる。39歳だった。

ある日、父は西脇に尋ねた。「先生、英語やラテン語以外で、たとえばイタリア語なんかはお出れになりますか?」と。すると「私はイタリア語はよくわかりません。でも、文学というのは、その国の言葉で読むのが一番ですから、ダンテの神曲だけはイタリア語で読みました」と返され、父は絶句した。

「これを読め」と父から詩集の『旅人かへらず』を渡されたのは中学2年生の時だった。

なんじゃこれは、まるで頑固煎餅みたいな詩だ。容易には噛みつけない堅さで、まったく意味がわからなかった。

詩集を放り出したまま20年の歳月が流れ、中年女となった私は幸せなことが少ないために、ひどい不眠症になっていた。ある晩、『旅人かへらず』を手に取ってめくってみた。まるで乾いた砂に水が染み渡るように、そこにある詩が体内にどっと流れ込んできた。

「むらさき水晶 恋情の化石か」

なんと美しい言葉の組み合わせだろう。硬質の情緒にすっかり掬われ捕られてしまった。いつか西脇が書いた英文の詩も読みたいものだと思っている。どうやら現世では間に合わないみたいなのでそれは来世の楽しみとしよう。西脇の詩は不滅だ。